猫

根来　澪子

私は猫が好きである。猫に対するまなざしは愛児に対するそれとなんら変わることはない。毛並みでいえば猫は真黒、白黒ブチ、三毛（みけ）、縞虎など様々であるが、私の好みは何といっても黒とグレイの縞虎猫である。百獣の王、勇猛果敢な虎（私にとってはライオンに非ず）に似た、凛とした風貌を持っているが、愛玩動物の部類に属し、抱いて頬ずりをすることもできる。しなやかに足元にじゃれつく媚態は天性のものでありながら、飼い主にたいして、ちょっと気取ってそっぽを向いたりもする。個々の猫によっては若干の相違があるようだが、両耳をぴんと立て、鼻梁が高く、目はらんらんとして瞳は陽ざしによってどのような大きさにも変化する。貴族的な髭、口元のどう猛さは顎で隠していて、泰然自若と構え、辺りを睥睨している。猫の「ニャー」という声はそのニュアンスによって、空腹の時、甘えるときなど人間にも通じるような聞き分けができる微妙さを持っているのである。

テレビの映像でおなじみの岩合光昭の「世界猫歩き」は何度見ても飽ない。様々な国の猫の映像はそれぞれのお国柄に猫が溶け込んで、撮影者の愛情がひしひしと伝わり、猫好きは本当に癒される番組である。ドキュメンタリー番組、養老孟司の愛猫「まる」も何度かテレビでみた。由緒ある血統の猫のようで品格のあるおだやかな顔をしていたまるは昨年暮れ、１８歳で天寿を全うした。幸せな猫であった。

猫を描いたエッセイや小説は数知れず、現在は猫ブームもあって私の読んでいない作品も多数あると思うが、猫好きの代表格の作家は何といっても大仏次郎であろう。いつも十数匹の猫を飼っていて「猫は一生の伴侶」といっていたという。池波正太郎や三島由紀夫も猫愛好者として知られているようだ。佐野洋子の『百万回を生きた猫』という絵本もよく知られていて、意味深な大人向けの内容でもある。

また、作者は忘れたが『もう猫なしでは生きていけない』という究極のタイトルのエッセイも読んだ。

猫を主人公にした小説、夏目漱石の『吾輩は猫である』はある日、突然あらわれたノラの黒猫を飼い猫にして擬人化し、猫に託して社会風刺を繰り広げている。教科書にも載っている名高い名作だ。この猫には実際

のモデルがあって名前のない猫（名をつけなかった）を大変に可愛がっていたが、亡くなってしまった時、友人や知人に死亡通知を送ったり、１３回忌には供養塔を建てたという。何年か前に訪れた、早稲田にある漱石山房には「猫の墓」があったし、館内は猫グッズであふれていた。

漱石の弟子の、内田百閒の猫に対する思い入れも漱石に負けてはいない溺愛ぶりである。彼は『ノラや』という作品で、ノラ猫が生んだ子猫を飼うようになったいきさつを述べ、「ノラ」と名付けて、夫婦で最大限の愛情を注いで育てていたのに、一年半後に家出をしてしまい、ついに帰らなかった。行方不明になったノラに語り掛ける言葉の数々は哀切に満ちている。「ノラ、お前はどこへ行ってしまったのか」という語句がリフレーンのように繰り返され、その嘆きは尋常ではなく、涙が川のごとくに流れ、食事も喉を通らず、人前もはばからず号泣し、憔悴する。

外で戸の鳴る音がすると夜中でもノラが帰ったのではないかと起きて確かめ、雨が降ると濡れているのではないかと泣き崩れるのだ。ノラを探し出すために２万枚のチラシを配り、新聞広告をだし、日本語を読めない外国人のためにも英字ポスターを５００枚作るのである。

探しだしてくれた人には３０００円の謝礼をさし上げるということもあって方々からノラらしい猫を見たという情報がはいり、そのたびに家人が見に行くが、すべて徒労であった。ノラはどこにもいない。百閒はその後、ノラをあきらめることなく探しながらも、ひょっこりと家にやってきたノラにそっくりな猫（おそらく兄弟か）をクルツと名付けて飼うことになった。クルツは何処かの家の飼い猫のようだったが、百閒の家に居着いてすましている。クルツは人に飼われているという劣等感など微塵もなく、わがままに横柄にふるまい、したい放題の事をし、ほしいものは遠慮なくねだる。首輪の鈴の音をさせながら元気に歩き回っていたのだが、あるときから元気がなくなってしまう。

犬猫病院の院長先生にたびたび往診に来てもらうが病状は芳しくなく、夫婦の懸命な看護にも関わらず、夫婦の慟哭の声を聞きながら可愛い小さな命を終えて

しまうのである。ある日の日記には「夜半３時半に起きだして、クルの寝ている新座敷に行き、クルの様子を見る。朝、重ねてドクトル来診、手当、心配だから起きだして立ち会う」とある。「１１日間、夜の目を寝ずにお前を手放すまいとしたのに、クルヤ、お前は死んだのか」と又もや百閒の悲しみは深い。ミカン箱に納棺し、タオルや布団の上に寝かせて庭の隅に葬る。クルツとは５年半の付き合いであった。

まさに「ペットロス」の心境をつづった代表作であろう。読み始めたときは不謹慎にも老人が泣きくれるさまが大げさに思えて滑稽であった百閒の悲しみが、その深刻さが、読み進むうちに感情移入され、やがて読者はわがことのようにノラの行方を案じ、何とか見つかってほしいと願い、クルツの病が治ってほしいと念じている。ついに再び現れることのなかったノラはどこかで、誰かに飼われていると信じたい。

動物は人間に寄り添うのはいつの時代も同じである。現代はウサギも仲間入りをして室内で飼っている人も多いと聞く。核家族になって望むと望まないにかかわらず、ひとり暮らしで何かを愛さずにはいられないとき、犬、猫は恰好の対象であろう。

２月初めのうすら寒い日、夕方の買い物から帰宅の途中、我が家に近づいたとき、どこからともなく猫が現れて、「ニャー」となれなれしく足元に絡みついた。真ん丸な体型である。突然のことで、近所に猫はいないはずなのに、不思議に思い周囲を見回した。私鉄の駅から徒歩２０分の郊外であるわが近郊の家でも、最近はノラ猫など見かけないし、犬と同様に猫用ゲージにいれ、室内飼いで、外での放し飼いはしないという家庭も多い現在、どこの飼い猫なのだろう。私の好みの大柄な縞虎だ。からまる猫をよけながら、そろりそろりと歩く。なんと一緒についてくるではないか。かなり古びてはいるが首輪をつけている。

心当たりは全くないが近所の飼い猫であることは確かだとおもう。猫は行動範囲がそんなに広くはない。猫は私と一緒に土足のまま玄関から入った。「ニャー」と語り掛けるように私を見上げ、かわいい声でなく。「よしよし」と頭をなでて抱きあげたらゴロゴロとうれし気に喉をならす。会ったばかりの人間に抱かれているというのに、この猫には人間に対する不信感はないようだ。我が家の室内を歩き回って満足したように玄関からサッと出ていった。狐につままれるとはこのことだ。

2、3日経ってまた家の近くで同じ猫に出会った。もちろん名前も知らない。ネコ、ネコと呼び掛けたら、親し気にまたもや「ニャーん」と傍にきて足元にじゃれつく。顔は比較的小さいが、抱くと腕が痛くなるほどの重さである。かなりの肥満体だ。私を見上げながら道路に寝転がって背中をアスファルトにこすりつけ、あられもなくお腹を丸だしにして、手足をバタバタさせ「ニャンニャン」と言っている。頭を撫でてあげたので猫なりに喜びの気持ちを体いっぱいに表現しているようだ。

「お前のお家はどこなの」と話しかけながら家に入り、居間のソファに腰かけ、後からついて入ってきた猫に「おいでおいで」と手招きしたらヒョイと飛び乗り私の膝にちょこんと座るではないか。あまりのなれなれしさに本当に驚いてしまった。「お前は誰にでもついていくの」と話しかけても返事はない。私の顔をじっと見つめては「ありがとう」といっているように、ゴロゴロと挨拶をする。誠意をこめて背中を撫でまくったら満足したように、スタスタと出ていった。

その後、猫は偶然にしては多すぎるくらいの割合で私が外出した時に我が家のまわりで出会うのだ。晩春の穏やかな昼日中、庭が広いので遊んでいるのだろうか。どうして今まで気づかなかったのか。突然の邂逅にうれしいやらで、ここぞとばかり猫を愛撫する。猫は、「女と猫は呼んだ時に来なくて呼ばない時に来る」という諺があるくらい気まぐれで、あまり撫でまわすと飼い主でもうっとうしがってフンとばかりに逃げたりするのだが、我が家にやってくる猫は実に素直に、人間にすべてを任せ、自分の意志などないようにくたくたのぬいぐるみのように喉やら頭、背中など、撫でまわしても平然として身体中を摺り寄せてくる。よほどかわいがって育てられているのだろう。この甘えぶりはおそらくメスだと思う。

他家の飼い猫なのだから、相手の家族に配慮して、控えめに接することを心掛けるべきだと反省し、夕方にやってきたときは室内に上げずにそのまま帰すべきと思い、涙を呑んでチーズかまぼこに鰹節を混ぜたもの

を玄関のそとで与えて戸を閉める。「お家に帰りなさいね」と言い聞かせて。これだけ従順で温和な性格の猫である。飼い主のために私は無責任な可愛がり方をしてはいけないと思うに至った。しかしなんとも愛おしいい。抱きしめて頬ずりをし、「アイしているよ」とささやくと、うっとりして目を細め、ゴロゴロと私の顔を見つめる。もうメロメロだ。飼い主が他にいるだけに想いはつのる。2，3か月と経つうちに猫との付き合いは深まっていき、いつもぼんやりしているときは猫のことばかりを考えているようになった。

今頃はご主人さまの家でくつろいでいるのだろうか、甘えて眠っているのだろうか。今頃は……。内田百閒の心境が実によくわかる。この猫はもしかして神が与えてくれた贈り物であろうか。ここ何年か、親しい人たちと次々に死別した私の喪失感を神が憐れんで、使わしてくれたものだろうかと、無信心の私が感謝したい気持ちになるほどの突然現れた愛情の対象なのだ。

「これネコや、お前は何を考えているの、本宅を抜け出して愛人宅に通う恋人のようにやってきて、私の家で何時間かを過ごしては、やがてスタスタと帰っていく。気の向いたときに私の家の周りをうろうろし、ちょっと媚びたしぐさをし、ネコや、ネコやと待ち構えている私へのサーヴィスのように「ゴロゴロ」と喉を鳴らし、ソファで一眠りして大きなあくびをし、ノソノソと出ていく。私は猫が来てくれただけで幸せな気分になってなんとなくご機嫌になるから単純なものだ。百閒と同じように私も「ネコや、ネコや」と喜んでいる。

4月に入ったある日、やはり買い物帰りに玄関の前

で猫に出会い、相変わらずニャンニャンと足元に絡みついているのをかまっているとき、小学2、3年生ぐらいの女の子が二人、目の前の道路を通りかかった。猫がじゃれているのに気付いて、「まったく甘えん坊なんだから」という。「何処の家の猫かしら、知ってる？」と尋ねたら「あっち」と我が家の裏庭の方角を指さした。漠然としていて参考にならない。「なんという名前の猫かしら」と聞いたら彼女たちは声をそろえて「グレイ」といった。「名前はグレイというのね、どうも有難う」お礼を言って改めてグレイを眺めた。近所の子供たちが知っているということは、ちょっとは知られた存在のようだ。「グレイ」と呼んでみた。グレイはすましこんで知らない顔をしてそっぽを向いている。そうか、お前はグレイだったのか、と改めて見直したがどうもグレイというしゃれた風情ではない。「とら」とか「たま」などという名前がふさわしい平凡な雑種だ。おそらく子猫の時から飼っているに違いない飼い主は、万感の愛情をこめて「グレイ」と名をつけたのだろう。「グレイ」とつぶやいているとき、なにか、心の奥に響くものがあった。名前に記憶があった。そうだ、私はもうかれこれ１０年近くも前『グレイはどこに』という、猫にまつわるエッセイを書いたことを思いだした。

猫好きの私が道でたまたま出会った美しい猫に惹かれて彷徨う話である。その猫に私は勝手に「グレイ」と名付けた。「グレイ」という名にふさわしい高貴な品種の大型猫であった。ここ何度か、わが家を訪問しては私を癒してくれている猫の名が同じ「グレイ」とは。この偶然に、神秘など信じない私が非常な驚きを持ったことはたしかである。当時、懸命に探し求めたグレイは今、私の家にやってきたのだ。容貌は似て非なるものとはいうまい。２０１０年、丁度１０年前に書いたエッセイを読み返した。原文のまま転載する。重複する部分が多いのは当時と現在の心境にほとんど変化がないということである。

『グレイはどこに』

孤独を癒すのに小動物ほどふさわしいものはないという（動物好きならばのことだが）。ことに老年の一人暮らしの孤独は、犬、猫、小鳥などを飼うことによって全く違った生きがいが見いだされるという話も聞いた。事実、わが子同様の愛情をもって育てている人が大勢いるのを目にする。

わが家は結婚１０年ほど経ったころから何年かにわ

たって犬を飼っていた。よく言われるように犬は人間に忠実で、飼い主にたいする喜びの表現は気のどくなくらいである。散歩の時、えさを与えるときの尻尾のふり具合は過剰なほどの愛情表現だ。飼い犬の死に出会ったとき、私も涙を流し、もう二度と飼うまいと決心するのだが、すぐに忘れて新しい犬に飛びついていた。２０年ぐらい、そんなことの繰り返しであった。

しかし、夫が逝ったあとに、娘二人は独立したものの、元気盛りの６歳のビーグル犬「ルル」と、くたびれ切った６０歳の私が取り残されたとき、途方に暮れた。狩猟犬であるビーグルは特別行動が激しい。おまけにしつけもできていなかったので散歩のときなど、おのれの意のむくままに私を引っ張っては引きずり回し、必死になって追いかけるありさまであった

夫が亡くなって一年が過ぎたころ、家の外装工事にはいっている職人たち５、６人のお茶の時間に「もう私は年で、犬を世話するのは大変だから、誰かこの犬をもらってくれる人はいないかしら」と言った。ルルは首をかしげてじっと私の顔を見つめていた。そのうるんだような目を今も忘れることはない。私もすぐに反省をしてあわてて頭を撫でたのだが、４、５日してルルは首輪を外し、行方不明になったのである。

保健所、動物保護センターなどへ一週間ほど問い合わせの電話を掛け続けたがいずれにも保護されることなく現在に至っている。何度か散歩コースを探しまわったのは言うまでもない。犬には人間の言葉が通じるという。胸の痛くなるような思い出なので、できるだけ封印しようとしているが、時としてあの時のルルの悲し気な目を思い出すとたまらなくなる。もう動物は二度と飼うまいと決めて現在に至っている。いまや自分の年齢を考えれば彼らの一生に責任をもてないことを知っているので犬を飼うことはすでにあきらめている。

猫に関しては、１８歳まで暮らした私の生家ではいつも何匹かの猫を飼っていて、猫がいるのが当たり前のような生活であったが、結婚してからは飼ったことはない。夫が、猫が嫌いだったということもあるが、それでも子供たちが小学生のころ、近所の飼い猫をわが家でも「マイケル」と名付けてかわいがり、飼い主の了解も得ていた。マイケルは実によくなついて、第二の住処として出入りして子供たちのベッドで眠ったりした。かなりの長命だったが、今は動物の霊園で眠っている。

以前から猫好きだった私が「猫と仲良しになろう」

と改めて思うに至ったのは、同年配の一人暮らしの友人が野良猫と付き合うことによって癒されているのを目のあたりにしたからである。朝と夕方、玄関にあらわれる猫のためにキャットフードを用意し、並々ならぬ心使いで、夕方など、猫が待っているからとそわそわと帰っていくのに影響されたのだ。

娘たちとの距離はいよいよ遠く、孫たちも大人になって私の出番はなくなった。猫とともにいることを寂しがっている場合でもない。しかし、彼らの生涯を、責任を持って面倒を見ることができない以上、行きずりに猫に出会ったときに触れあうという程度のことしかできないのだと自分に言い聞かせて、駅からの帰り道、散歩のときなど、猫に会いたいと念じて裏道を歩く習慣がついた。猫が歩いているのを見かけるや「ニャー」と声をかける。猫語というものがあるかどうか、声をかければ彼らは不審そうに振り向く。そこで再び「ニャーん」と猫なで声で話しかける。彼らは大抵長い尻尾を2、3回振り回し、胡散臭い人間を眺めまわすと「興味ありませんよ」とばかりにさっさと走り去ってしまう。野良猫なら一目散である。私の猫に対する愛情表現は未熟のようだ。猫は警戒心が強く、人間に媚びずわが道を行くといった孤高の精神を持っているのでどうすれば彼らの関心をかうことができるか、煮干しをバッグにいれて持ち歩くようになった。

二週間ほど前のことである。努力のかいがあって、ふさふさした毛並みの、グレイの大きな猫に出会った。以後「グレイ」と呼ぶことにする。以前は猫の品種の高級代名詞は「ペルシャ猫」、「シャム猫」などがあったが、いまや多様な品種のグレードの高い猫が多くなり、名前をおぼえられないほどだ。その猫もなんという品種か。住宅街の裏道で突然出会ったのだが、グレイは品格の備わった、素足のままで道を歩くような、ぞんざいに飼われている猫にはみえなかった。

「ニャーん」と声をかける。グレイは立ち止まって私の顔を見あげた。真っ黒な瞳の大きな目、かすかに縞模様をもった貴族的な鼻。毛並みは豊かだが、背中は

ほっそりと繊細に伸びている。何といっても刷毛のようにふさふさした尻尾の美しさ、猫にもこれだけの美醜はあるのかとグレイの容姿にうっとりとして後をつける。グレイは走り去るでもなく、チラッと私の方を見上げては人通りの少ない道を歩いていく。猫がこんなにのんびりと歩いていくとは知らなかった。声に出して話しかけてみる。

「グレイ、お友達になりましょう」「グレイ、なにかほしいものをあげたいわ」。グレイはわかってくれただろうか。足の遅い私を待っていてくれるかのようにゆったりと後ろを振り向きながら散歩をしているようだ。かなりの距離を歩いたような、そうでもないような。時間や距離の感覚をなくして、ただグレイの後をついていった。美女を付け回すストーカーの気持ちがわかるような気がした。

やがてグレイは突然に、葉を落としたどうだんツツジの垣根を巡らせた庭のなかにもぐりこんでしまった。見失うまいと慌ててつま先だって庭の中を覗き込んだ。山茶花や馬酔木など小ぶりな木立が芝生に点在して手入れの行き届いた庭である。しかし、たっぷりとした体重を揺らしながら歩いていたグレイの姿は見当たらない。垣根にしがみつき、懸命に覗き込むが、玄関の方に回ったのか、グレイの姿はない。「グレイ」と小声で読んでみた。

「どなたです」裏庭の方から声がする。エプロン姿の中年の女性が顔をだした。はっと我に返り、垣根にしがみついて他家をのぞき込んでいる自分の姿に狼狽した。「お宅様の猫がとても可愛らしかったので、ツイごめんなさい」と謝って後ずさりした。「猫？」と女性は不思議そうな顔をして私を窺った。「ええ、グレイの素敵な猫、なんという品種ですの、初めて見ました」。庭いじりをしていたらしいその女性は改めて私をじっと眺めまわし、「うちには猫なんていませんわよ、お隣にもいないし、猫にかこつけて他人の庭をのぞき込むなんてへんだわ」と疑わしい目つきをする。それでは家を間違えたのか。いや、グレイはたしかにこの家の垣根から、この家の庭に入っていったのだ。しかしそれを主張する権利はない。それどころか、もっとよからぬことを疑われても仕方のない状態だ。私は「ごめんなさい、家を間違えました」と頭を下げた。

両隣はブロックの塀に囲まれて、鉄柵の門は施錠されている。覗き込むのはもっと困難である。突然消えてしまった美形のグレイをこれ以上追い求めるのは無理なのか。いつのまにか、あまりなじみのない通りを

歩いていた。私は猫の幻影に惑わされて彷徨っていたのか。自分の行動に自信が持てなくなり黄昏の道をしょんぼりと待つ者のいないわが家に向かって歩いた。

我が家から一キロほど離れたその場所に、翌日も行ってみた。どうだんツツジの垣根を巡らせたその家は、当然そこにあった。家の前をしばらく行き来した。グレイに出会うことはなかった。またこの家の主に会ったら私の立場はもっと説明のつかない窮地にたってしまうだろう。たとえグレイに出会ったとしても所詮は他家の猫で私の片思いに過ぎないのだ。

グレイはどこに行ってしまったのだろう。

（２０２１年５月）